習志野受験研究所

千葉県公立高校入試【歴史・近現代】長期過去問分析・実戦トレーニング
～近現代中心大問 15 年から学ぶ「直近過去問の徹底回収」と「過年度命題の効率的補充」

対象者

千葉県公立高校入試で社会の得点源化・上位校合格を目指す中学 3 年生（および指導者・保護者）

特に適している生徒

- 過去問を直近 3～5 年分解いたが、初見問題になると急に正答率が落ちる生徒
- 用語の一問一答は解けるのに、短文記述（文中空欄補充）や年代整序（4 選 3 整序）で失点してしまう生徒
- 日本史と世界史が連動する問題や、似た条約・内閣・経済政策の識別で迷ってしまう生徒
- 過去問の「答えの記号」を覚えてしまい、2 周目の演習で実力がついている実感がない生徒
- 「直近数年分を解き終えた後、古い過去問にどこまで遡るべきか、どう復習すればいいか」に悩んでいる生徒

本教材の設計思想：過去問 15 年データが教える「学習時間の最適配分」

千葉県公立高校入試の歴史分野（近現代史中心大問：2012～2025 年度は大問 5、2026 年度は大問 3）における過去 15 年間（計 24 試験・全 113 設問・125 解答単位）の分析から導き出された結論は、「やみくもに古い過去問を解きまくるべき」という単純な根性論ではない。

- **直前 3 暦年だけでも、後の入試に関わる命題の「40.5%」が登場している** 各年度の直前 3 暦年（前期・後期制の時代は最大 6 試験分）の過去問を調べるだけで、正答決定に必要な具体的命題が少なくとも一部確認できた設問は 40.5%（34/84 問）に達する。短期間の過去問であっても、後の入試につながる知識との接点は約 4 割の設問に存在する。しかし、この知識は「正解の記号だけを確認する学習」では見落とされやすい。正答以外の選択肢（誤答選択肢）に含まれる出来事や、問題文・年表・カードの事実関係まで「命題」として整理して初めて、確かな学習効果が得られる。
- **2012 年度まで遡ると関与率は「57.1%」に達し、全要素既出は 2 倍以上に増える（遡及学習の確かな価値）** 2012 年度まで過去問を遡って照合すると、過年度の具体的命題との一致が少なくとも一部確認された設問は 57.1%（48/84 問）に増加する（+16.7 ポイント）。特に、正答決定に必要なすべての要素が過年度に出揃っていた設問（全 A 命題既出）は、直前 3 暦年の 14.3%（12 問）から 32.1%（27 問）へと 2 倍以上に増加する（+17.9 ポイント）。さらに、全要素が揃っていた 27 問の過半数にあたる 55.6%（15 問）は、必要最小命題を確認するために 4～9 年前の過去問まで遡る必要があった。なお、正答としての出題履歴をさらに遡ると、11 年前に同じ歴史的事実が出題されていた事例も確認できる。時間があり、古い過去問を入手できる環境にあるならば、過去問を深く遡って演習することには大きな価値がある。

- **しかし、すべての受験生に「24 試験分を解き切る時間」があるわけではない** 受験生には英語や数学・理科の対策もあり、社会の中でも地理・公民・古代～近世史の補強が必要である。24 回分もの過去問を自力で解き、すべての選択肢を分析し切る時間を確保できる受験生はごく一部に限られる。

そこで本教材は、2027 年度以降の入試対策として、受験生の限られた学習時間を最大化するために以下の「3 段階の学習アプローチ」を提案する。

［第 1 段階：直近 3 年分（2024～2026 年度）の徹底回収］
手持ちの直近過去問を自力で解き、正答だけでなく誤答選択肢や年表・資料まで「命題」としてできる限り取り出す（第 5 章の処理シートを活用）。

▼

［第 2 段階：4 年以上前（2012～2023 年度）の過年度命題を効率的に補充］
2027 年度入試対策として、直近 3 年度より前の 2012～2023 年度の過年度過去問については、当研究所の 15 年分析から抽出された重要命題マスターリスト（第 6 章）で一気に習得する。

▼

［第 3 段階：過去問未一致（残り 42.9%）への対応］
過去問に同じ命題が確認できなかった設問でも、教科書の基本知識や資料読解力によって対応できる問題はある。基礎知識を補強し、初見資料や異なる知識を組み合わせる問題に取り組むことで、上位校合格に必要な得点力を養う。

【冒頭 1 分要約：15 年・全 113 設問分析が導いた結論】
【結論】過去問演習のゴールは「答え合わせ」ではない。直近の過去問を「誤答肢・年表資料」まで徹底回収し、遡りきれない古い過去問のエッセンスは専門家の分析で効率よく補うことである。2012～2026 年度の 15 年間（全 24 試験・計 113 設問）の入試データ（2015～2026 年度の同一母数 84 設問で照合）を分析すると、以下の事実が明らかになっている。

1. **直前 3 暦年で「40.5%」の設問に命題が存在する（短期間でも高い回収価値）** 直前 3 暦年の過去問を調べるだけで、正答決定に必要な具体的命題が少なくとも一部確認できた設問は 40.5%（34/84 問）に達する。ただし、正答の記号を覚えるだけの浅い復習では、その知識を見落としやすい。
2. **2012 年まで遡ると「57.1%」に関与率が増加する（遡及学習の確かな効果）** 過年度の過去問を累積参照すると、同一命題が関与した設問は 57.1%（48/84 問）となり、全要素が揃う設問（27 問）の 55.6%（15 問）は、必要最小命題を確認するために 4～9 年前の過去問まで遡る必要があった（なお、正答としての出題履歴をさらに遡ると、11 年前に同じ歴史的事実が出題されていた事例も確認できる）。古い過去問を遡る学習には間違いなく価値がある。しかし、全 24 試験分を自力で解いて分析する時間がない生徒のために、本教材がその重要知識を凝縮して提供する。